

新 歌人群像

真鍋美恵子

何よりも歌を愛した人生

前田康子



親や夫に反対されながら

真鍋美恵子は明治三十九（一九〇六）年、父酒井乙三、母鈴子の長女として岐阜市に生まれた。

父は官吏。祖父は柳下亭種員という戯作者で、広重の『東海道風景図会』などに解説文などを書いている。朝鮮半島中西部の海州や静岡で過ごし、その後東京に落ち着き、大正十二（一九二三）年、東洋高等女学校を卒業。翌年、竹柏会に入り、印東昌綱（佐佐木信綱の弟）に師事し、十九歳頃に短歌を始める。

美恵子の家では、文学をするということとはかならずしも、認められた行為ではなかった。花嫁修業の習い事の合間に、本屋などでこっそりと詩歌に関する本を読んでいた。島崎藤村が特に好きで、それを誦んじたり、時にはスタインベックや、シヨロホフの長編なども愛読していた。

ある日、女学校の同級生に突然、佐佐木信綱先生のお宅を知っているから行ってみようかと誘われたらしい。連れて行かれたものの、友達は玄関で姿を消し、美恵子だけが残された。そこで、信綱に会うことができ、印東昌綱への紹介を受け、その日のうちに弟子入り

したという。

昭和二（一九二七）年に農林省に勤めていた真鍋博徳と結婚。昭和四年、九年と長女、次女をもうける。夫は、女性が文学をすることには反対で、そのような中、何度も歌から離れようとする迷いもあったが、幸いにも歌集を出すことにはあまり反対されなかった。

昭和十六年、誤診のためにジフテリアが悪化し、回復までに四年あまりかかった。

処女歌集『怪』が私家版で出版されたのは、昭和十九年、美恵子が三十八歳のときである。まだ病が癒えてない時期だが、師の助言のもとに歌集を編んだ。その歌集印刷中に、師の印東昌綱は逝去。

青草をさくさく食める牛の口にひる顔
の花もつきて入りたり

昭和十年ごろの歌である。幼子たちを育てながらゆつたりとした心持ちであり、その中に確実にものを観察している力を感じさせる歌。

母われの常病む姿いにかにも伸び育つ
子に映るとおそるる

病に臥してからは命を真摯に見つめた歌、母として、妻として、家族を思いやる歌が多く詠まれ、戦争で外の状況も不安定な中、病

に負けまいとする美恵子のぎりぎりの思いが伝わってくる。

昭和二十年、敗戦を長野県軽井沢で迎える。昭和二十四年、流派を超えた女流歌人の集まり、「女人短歌会」が発足した。五島美代子、生方たつゑらが中心となる中、美恵子も入会した。

百合の芽が恐ろしきまで大胆にその持つ個性を伸しゆくなり

『白線』を出版した。第一歌集の穏やかな家庭婦人らしい印象と違い、自己の内面を文学的に覗き込むような歌が多くなってきているのが特徴である。

割りし玉子の黄身崩れたりわがもてる
不安具体に言ひがたきかも
蜥蜴のやうな指してスプーンをわが前
に人があやつりてゐる

一歌集ごとに、歌一首ずつの内容が濃くなって、観察眼に鋭さがあり、何気ない歌でありながら気迫がある。素材は日常的なものでありながら、一首の持っている世界は非日常までひろがり、ものの真実を凝視している。

昭和二十年代は齋藤史、葛原妙子、山田あ

き、五島美代子、森岡貞香、中城ふみ子らが華々しく歌集を出し、戦後女流短歌を盛りたてていった時期である。その流れに少なからず影響を受けながらも、美恵子は独自のスタイルの歌を詠みはじめていたように思われる。昭和二十七年には「心の花」の編集委員となり、昭和三十四年には『玻璃』が現代歌人協会賞を受ける。

『玻璃』に大きく影響を受けたという尾崎左永子は、

「……真鍋さんの印象は、いつもおだやかで控え目なあなたか人柄と感じていたのだが、作家としての真鍋さんは昔酷



娘たちも結婚し、夫・博徳と京都旅行を楽しむ。(1984年)

真鍋美恵子



佐佐木信綱・由幾（前列）を囲む「心の花」の同人。左より石川不二子、栗原潔子、遠山光栄、真鍋美恵子、木尾悦子。（「心の花」創刊100年記念号より）

なほど厳しいところがある。」（『真鍋美恵子全歌集』栞より）
と回想している。

桃むく手美しければこの人も或はわれを裏切りゆかん

【玻璃】

「玻璃」の中でもよく引用される歌であるが、「この人」が誰で、何故裏切ると予想するのかはわからない。無言の激しさが流れるなか、謎とともに桃むく手だけが宙に浮かび上がり、像を残す。

支へなき心とおもふ赤き布洗ひて赤き水流したり

【蜜糖】

昭和三十九年、美恵子五十八歳の時『蜜糖』出版。己の生きる道を辛辣に見つめる姿勢がいよいよ強くなっている歌いぶりである。

瀑布のごとくかがやく

昭和四十五年、夫や妹夫婦とともにヨーロッパを旅行している。美恵子は遺跡が特に好きで、海外に行ったときもよく見に行っているし、登呂遺跡には二人の娘を連れて出かけている。遺跡発掘の記事を見ると一種の興奮を覚えるという。また色々な石の手触り、古い教会などの時代を超えた石に興味があったようである。

同年第六歌集『羊歯は萌えらん』を出版。この頃の歌壇は、「反措定」や「幻想派」など学生が主体となった同人誌が創刊され、岡井隆、塚本邦雄、高安国世、近藤芳美などの歌集が続々と出版されていた。

八月のまひる音なき刻ありて瀑布のごとくかがやく階段
『羊歯は萌えらん』
思ほへず夜半にわが見つ窓下の土が意思もつ如く光れる

「瀑布」は滝。のちに美恵子の代表歌とも

呼ばれるようになった歌である。河野裕子はこの歌について、

「いっさいの感情を混ぜずに、対象だけをくつきりと描き出して余剰がない。（中略）『瀑布のごとく』といいつつ、しかしこの階段の何と静かなことか。」（三省堂『現代短歌大事典』）

と述べている。「ごとく」や「ような」の直喩は短歌の技法のなかでもっともポピュラーなものだが、直喩の持つ力をさらに突き破るような強さがある。二首目も同等のことが言える。

血のにじみきたれるものをみな入れつ冷蔵庫の輝く扉の面あり
『羊歯は萌えらん』

このような、言葉と精神の緊張度の高い歌が、この歌集には多く、確実に真鍋美恵子の世界が完成した歌集と言えるだろう。

「一番大切なのは推敲であろう。一首とするにあたっていいかげんの妥協をしてはならない。自分の思いがほとんど完全に近いと言つてよいくらいまでに、表現し得たか、をたしかめながら推敲を重ねなければならぬのだ。」

エッセイ集『四日月』のなかで短歌作法として、このようなことを説いている。また美



『真鍋美恵子全歌集』出版祝賀会で、夫・博徳と（1983年）

昭和五十一年、七十歳の美恵子は第七歌集

今出来ることは今やる

恵子の歌は、玉子や、沼など同じ素材が、何度も歌い深められていることが多い。それは、一つの歌集の中だけでなく、何冊の歌集にも亘っていることがある。推敲を重ねることと同じ素材を詠み込んでいくこと、このような姿勢を終生崩さなかったことで、数々の秀作が生まれた。

『土に低きもの』、七十五歳で『雲熟れやまず』を出版。

昭和五十八年に出版された『真鍋美恵子全歌集』は『雲熟れやまず』までの八冊と自筆年譜を書き加えたものである。

この頃の美恵子は、二人の娘もそれぞれに家庭を持ち、近くに住んでいたため、孫たちの面倒をみながら、ゆつたりとした日々を送っていたようだ。また姉妹三人で春と秋には旅行し、日本のあちこちに出かけて行っている。

秋となれば部屋と部屋とを胡桃の実の如く区切りて誰も孤り棲む

『雲熟れやまず』

おどろきのあらざる日々とおもへるに受けし新聞のほひにむせぶ 『彩秋』
まひるまのこのさびしさや金網にかかりし羽毛が風にひかりる 『冬海鳴る』

昭和六十一年には、全歌集の後に、なお加えたいとして『彩秋』、平成元年には十冊目の最後となる歌集『冬海鳴る』を出版した。『彩秋』は時期を早めて、出版された。それは健康であった夫君が、突然腹痛で倒れ、即日手術。奇跡的に命を繋ぎとめた。このことよって、美恵子は明日が必ずあるという

保障はない、今出来ることは、今やらなければならぬという思いに至ったのだ。

ただよひてありしのは風荒ぶ燈火の下によみがへらんとす 『彩秋』

この歌がそのときの病院での様子である。また二つの歌集は引用歌のように、美恵子の歌風が崩れず、鋭い感性がそのままある歌であることに驚く。文体も、表現も若いときから変わらず、終始一貫している。それが、自己模倣に陥ることなく、生の真実にひたすら向かっているのである。

歌との出会いから、生涯を終えるまで、歌を愛する気持ちは変わらなかった。いくらやつても限りというものがない「歌」。それに一生をかけていこうという覚悟が、常に美恵子のなかにあったと記している。そして「おのがじし」で好きなように歌を詠めばいいという「心の花」の自由な気風が自分に合っていたという。

平成四（一九九二）年に夫君が亡くなり、その後、美恵子自身も急に老いが進んでいたという。平成六年九月二十九日に、眠るように静かに八十八歳の生涯を終えた。

（まえだ・やすこ「塔」会員）